



秋建時報

最終號
紀念特集

最終号のご挨拶

建設業のイメージアップ



会長 菅原 三朗

現在、建設投資の急激な減少が続く中で、地域建設業が疲弊し、地域防災の担い手として、国・地方自治体との協定に基づく災害対応の機能の維持すら困難となり、“災害対応空白地帯”が発生する等の問題が指摘されている。

国の政治経済は、戦後一貫して関東・中部・近畿の大都市圏優先が続き、2001年以降の構造改革による規制緩和や、野放しの市場原理による競争激化と、間違った公共事業不用論による事業量の大幅削減が、財政の弱い地方と大都市圏との格差拡大を一層助長し、このため地域建設業は今や崩壊の危機に瀕している。

我々も決して手をこまねいてきたわけではない。遅れている東北地方のインフラ整備促進のため、東北の経済5団体で1983年以来毎年フォーラムを開催し、その必要性と促進を訴え続けている。同時に又建設業に対する正しい理解の促進とイメージアップを図ろうと、早くから各種イベントの開催によるPR活動をはじめ、近年は地域の環境保全のため、河川・道路・森林等の美化活動や、安全パトロール等を通じ地域に根差した様々な取り組みを実施し、地域社会に大きく貢献してきている。

しかし、こうした活動は新聞・テレビ等のマスコミで報道される機会も少なく、地域の一般の人々への正しい理解促進やイメージアップは中々難しいものと実感している。

先般、秋田県建設関係三団体の共催による恒例の「新春講演会」が「不良長寿のすすめ」という演題で、順天堂大学医学部免疫学講座特任教授の奥村康先生を講師に開催された。折角、奥村先生が秋田市で講演されることから、建設業関係者だけでなく広く一般の方々にも呼びかけてはどうかと言うことで、地元新聞への広告やテレビでコマーシャルを流したところ400名近い申込みがあり、会員と合わせ500名を超える参加者となった。

今の時代、皆さん健康については大変関心があり、「不良長寿のすすめ」と言う演題も中々興味深々なところがあったようである。先生は現在日本免疫学の権威である。脳内出血や心臓病の発作などの場合は3時間(ゴールデンタイム)以内に専門医で治療を受けることの必要性やコレステロール値の話、タバコの効用や免疫力を高めるナチュラルキラーの話や一部上場企業の部長で退職したような「まじめ」は寿命を縮める話、ストレスを溜めないことの大切さなど、90分の講演はあっという間に過ぎた。終了後、直接先生のところへ行って色々質問をする人も多かった。

私が、「どうでしたか」と声を掛けた人達は異口同音に「素晴らしかった」と仰ると同時に「建設業協会がこんな『洒落た事業』もやるんですね、見直しました」と言う言葉を聞いた時、ずばり我々の当初の目的であった一般の方々にも広く参加をしていただき、この講演会が建設業のイメージアップの一助にでもなればという思いが見事達成されたところである。

地域建設業の長年に亘る地道な社会貢献活動は勿論大切ではあるが、発想の転換によるこのような「ソフト事業」と言うものも選択によっては、産業のイメージアップに大きく繋がることを痛感した次第である。

3月11日に発生した巨大地震である「東北地方太平洋沖地震」は、東北各県をはじめ北関東、太平洋沿岸部等広範囲にわたる古今未曾有の被害を発生させました。

被害に遭われたの方々に対しまして、衷心よりお悔やみとお見舞いを申し上げますとともに一日も速い復旧をご祈念申し上げます。

建設業界は、被災地からの要望等を集約しつつ、各災害対策本部と連携を図りながら、災害復旧支援活動として物心両面にわたり、業界挙げて支援・協力する所存であります。



(社)秋田県建設業協会・会館

表紙で見る「秋建時報」の歴史 P8

温故知新～創刊号を読んで～ P16

物書きのコトバ P18

私と「秋建時報」 P22

Web版「秋建時報」のお知らせ P24

秋建時報

最終号 記念特集

表紙で見る

秋建時報

の歴史

創刊号からのあゆみ

- 昭和10年 1月30日 秋田県土木建築請負業協会会報「秋田県土木協会会報」創刊。A4判、四頁、活字級数9ポ。次号からタブロイド版、「秋田県土木建築請負業協会会報」。毎月25日1回発行。購読料1ヶ月20銭(送料共)、広告料一行50銭。
- 2月25日 伍角舎主人「秋田県土木最近十年史論」を24回に亘り連載。
- 4月25日 「主張」「談話室」を新設、以後毎月掲載。
- 昭和11年 7月 1日 毎月1日、15日発行。購読料1ヶ月20銭(送料共)。
- 8月15日 「秋田土建協会新聞」と改題。第24号。
- 昭和12年10月30日 連載の「秋田県土木最近十年史論」を改題「秋田県土木史論」として発刊、著者山崎真一郎。定価1円50銭。
- 昭和13年 1月15日 「秋田土建新聞」と改題。第57号。活字級数8ポ。
- 3月22日 第三種郵便物認可。
- 昭和14年 5月23日 増刊号、第七回総会記念号。
- 11月 1日 第100号。
- 昭和16年 5月15日 北林庄作氏執筆の随想「身辺色々」を掲載。
- 昭和18年 4月 1日 秋田県労務報國会の「労報版」を新設。
- 昭和19年 2月 1日 「秋田土建新聞」廃刊。第202号。
- 昭和25年 5月15日 新聞発行に関する委員会を開催。
- 6月 1日 「秋田建設新聞」と改題、復刊第1号。タブロイド版、二頁、活字級数9ポ。毎月1回発行。
- 昭和26年 3月12日 知事選挙候補者で号外発行。
- 昭和28年 4月 1日 購読料1ヶ月20円。
- 毎月1日、15日発行。
- 5月15日 随想「身辺色々」が再開。
- 5月22日 第三種郵便物認可。
- 昭和29年12月20日 県災害復旧工事入札特報で号外発行。
- 昭和30年10月 1日 購読料1ヶ月40円。
- 昭和31年 8月15日 第100号。
- 昭和36年 1月 1日 第200号。
- 7月 1日 佐々木惣一郎氏執筆の随想「放言夜話」を44回連載。
- 8月15日 「秋建時報」と改題。活字級数9ポ。タブロイド版。
- 昭和37年 7月15日 活字級数8ポ。
- 昭和40年 3月 1日 第300号。
- 3月30日 連載の「身辺色々」を「建設の朝夕」として発刊、著者北林照作。
- 昭和44年 4月15日 第400号。
- 昭和47年 5月 1日 続「建設の朝夕」発刊。
- 昭和48年 6月15日 第500号。
- 昭和52年 8月15日 第600号。
- 昭和54年 5月11日 続々「建設の朝夕」発刊。
- 昭和56年 1月 1日 活版印刷からオフセット印刷へ移行。活字級数8ポ。
- 1月15日 長田藤吉氏執筆の随想「山王雑記」を掲載。ペンネーム古湊。
- 5月13日 「50年のあゆみ」発刊。
- 6月 3日 完「建設の朝夕」を発刊。
- 6月30日 第三種郵便物認可取り消し。
- 10月15日 第700号。
- 昭和60年12月15日 第800号。
- 昭和61年10月 1日 連載の「山王雑記」を発刊、著者長田藤吉。
- 昭和64年 1月 1日 新年号をカラー印刷。
- 平成 元年 2月15日 消費税への対応で号外発行。
- 平成 2年 2月 1日 第900号。
- 平成 5年 6月15日 酢屋潔氏執筆の随想を掲載。
- 7月31日 「秋田県建設業協会60年記念史」発刊。
- 平成 6年 4月 1日 復刊第1000号。
- 5月 1日 表紙写真、山脇新八氏(～平成9年12月1日)
- 平成10年11月 1日 表紙写真、山内与一氏(～平成10年11月1日)
- 7月 1日 全面カラー印刷。
- 12月 1日 表紙写真、永井登志樹氏(～平成11年7月1日)
- 平成11年 8月 1日 表紙写真、泉谷玄作氏(～平成19年3月1日)
- 平成13年 7月 1日 菅原三朗氏随想掲載。
- 平成14年 8月 1日 第1100号。
- 平成19年 4月 1日 表紙絵、白澤恵舟氏(～平成22年12月1日)
- 5月 1日 電子版(第1145号)
- 平成22年12月 1日 第1200号。



昭和10年1月30日発行

創刊号

本会広報紙の原点「秋田土木協会会報」(2号より「秋田県土木建築請負業協会会報」)

業是「土木建築事業は一国文化の象徴産業の先駆にして實に国民生活の根幹たり此の任に當たる者其の責務重大なりと謂ふべし……」

「土木建築事業の国家的産業上の地位」理事長 和賀眞一
「土木協会存立再認識」…常務理事 北林庄作

昭和11年8月15日発行

第23号

「秋田土木協会新聞」と改題。

記事として「道路網の完成—意気込む県土木課」、「県北産業の重要線—七大橋梁施工—三十四萬六千円で着工」、「県道八路線を指定府県道に申請!!—土木課から内務省へ」



昭和14年5月23日発行

増刊号

第七回定時総会開催を記念して発行

第七回定時総会は横手町(現・横手市)平鹿郡農会事務所を会場に開催された。

総会開催に寄せて片野復次郎横手町長、尾張謙吉横手商工会頭のメッセージを掲載。

ほか記事として「土木関係震災被害 約百二十万円—国庫補助獲得に猛運動」、「灯、軽油も統制に—県工業界緊張—農林水産以外は手が出ず」



昭和25年6月1日発行

復刊号

「秋田建設新聞」として復刊。
メッセージ「発刊を祝して」…池田徳治秋
田県土木部長、藤原東一秋田市土木部長、
佐々木惣一郎秋田県商工会議所会頭
特集「全国区参議院候補者の横顔」、「日本
建設行政の最高権威 前建設次官 岩沢忠
恭先生を讃う（酢屋政五郎理事長）」



昭和31年8月15日発行

第100号

1面に季節二題(写真)掲載「七夕の太鼓の音に賑わう協会前」「蓮の
葉に水面を埋める協会の堀 ※当時の協会所在地は秋田市千秋
北林庄作会長「身辺色々」
記事「愈々県工事発注される—第一次は22ヵ所 約七千万円」「民業
圧迫の兆、拡大を重視—全建が防衛庁に善処要望」「登録制を許可制
へ—建設省今月末業界と懇談」ほか



昭和36年1月1日発行

第200号

昭和36年新年号。
1面写真…勅題「若」を象徴する躍進の臨界工業地帯—県立公園 男鹿
寒風山から—
北林庄作会長「三六年の課題」、年頭挨拶…小畑勇二郎秋田県知事、川
口大助秋田市長、東村一朗秋田県土木部長、ほか各界著名人より



昭和36年8月15日発行

第215号

「秋建時報」と改題。

1面掲載「“秋建時報”題号変更認可」から……「秋田建設新聞」は営利新聞と紛らわしいこと、会報としての性格が稀薄ではないか等の批判が出ていたので、会報としての目的を一層明確にし業界の発展向上のために寄与するよう新たに“秋建時報”と題号変更認可を申請……



昭和40年3月1日発行

第300号

記事「県土木費当初予算 前年比12億3千万の増-災害復旧費一億七千万円増加」「退職金共済の加入促進-業務当局で同制度の趣旨徹底へ」「協会から優賞盃-40年建設技能競技会終る」
連載「現場の手引(9)これだけは知っておきたい-壁つなぎの例外」



昭和44年4月15日発行

第400号

記事「融雪災害発生(4月8日現在)三五七カ所 十億円を突破する」「県道路課-建設機械係を新設-保安管理の一元化を図る」「技能オリンピック全国大会で優勝-大曲市 吉川木工所 真崎森男君 ベルギーの国際大会に出場決定」「秋田県雇用対策協議会が設立される」
連載「現場の手引(21)これだけは守りましょう-クレーンの標準合図法」

昭和48年6月15日発行

第500号

記事「事業計画など決定－建築部会総会
ひらく」「《建災防》指導者講習会を開く－
車両系建設機械」「第2回土木技術委員会
開く－契約事項など協議」「昭和48年度
公共工事前払金保証状況・東日本建設業
保証(株)秋田営業所取扱分－昭和四十八
年五月末保証を顧みて」



昭和52年8月15日発行

第600号

記事「建設業 緊急特別研修会を開催－労働災害防止対策図る」
「昭和52年度工業事業－補正予算の大巾計上－県選出国議員
に要望」「《建退共》融資事業を実施－償還期限は15年以内」「留意
乞う！任意団体開催の講習会」



昭和56年10月15日発行

第700号

記事「東北連合会総会を開催－公共事業量の確保を決議」「第32回
(全国労働衛生週間)秋田地方大会を開催－労働者の健康を確保」
「(建設省)現場管理費率を一部改訂－十一月一日より適用」





昭和60年12月15日発行

第800号

記事「第12回総会ひらく－60年度事業目標など承認(秋田県建設技術研究会)」「視察協議会を実施－関係機関へ年明け陳情(※秋田県議会建設振興協力会)」

※秋田県建設振興議員連盟の前身

昭和64年1月1日発行

第874号

初の1面カラー印刷。掲載写真は「角館町伝承館」正面から撮影。長田藤吉会長「年頭の辞」を始め、佐々木喜久治秋田県知事、梅森昭治秋田県土木部長らの挨拶掲載。



平成2年2月1日発行

第900号

記事「全建評議員会ひらく－ゼロ国6千億を評価」、「合同役員会を開催(秋田県建設業協会、秋田県建設事業協同組合連合会)－若年入職促進協設置を承認」



平成6年4月1日発行(第1000号)

第1000号

復刊1000号記念号・14面構成。1面写真は創刊号(秋田土木協会会報)と復刊号(秋田建設新聞)。記念特集として「創刊号からの歩み」「題字の変遷」等掲載。9～14面には創刊号、復刊号紙面を掲載。



平成6年5月1日発行(第1001号)

第1001号

1面写真は昭和52年春、故 北林庄作会長の叙勲祝賀会の模様。山脇新八副会長撮影。



平成14年8月1日発行(第1100号)

第1100号

記事「フォーラム 東北は訴える！ーインフラ整備これでもいいのかー」「国土交通大臣表彰ー和賀・本郷両氏に栄誉」「(株)沢木組・(株)村岡組ー秋田労働局長表彰」ほか



平成22年12月1日(第1200号)

第1200号

記事「秋田県建設雇用・構造改善推進大会」「建設雇用改善推進全国大会」「勤労者退職金共済機構 理事長表彰」「常置委員会を開催」

故郷 おんこ・ちしん 知新

創刊号を読んで

支部長の皆様に、改めて『秋建時報』の創刊号を読んでいただき、感想・意見をいただきます。

読者にとっても、何かヒントがあるかもしれません。



創刊号を読んだ感想

北秋田支部長



北林 一成

昭和十年1月の協会会報創刊号、又北林庄作執筆の「建設の朝夕草創の時代」を読むと当時の社会情勢や業界の苦難の歴史が手に取るように伝わってくる。満州事変勃発前後の混沌とした時代に業界の先覚が立ち上がり昭和八年七月に七十六名で秋田県土木建築請負業協会が設立されている。戦時に突入してからは国内工事の減少に伴い昭和十四年に満州に進出している。この苦難の時代にありながら建設業を営む者の自信と誇り、そして協会存在の認識のくだりはあまりに気高く、ただただ敬服する域にあります。それから七十五年、今日の建設業を取り巻く情勢は再び厳しいがありますが、先人の持っていた誇りと理想を失ってはならないと感じております。

創刊号を読んだ感想

由利支部長



村岡 淑郎

さる3月11日発生しました、東日本大震災により被害を受けた皆様に心よりお見舞いを申し上げますと共に、亡くなられた皆様のご冥福をお祈り致します。

この大震災の人知を超えた壊滅的被害は、災害の巨大化に対する備えの大切さを再認識するところであり、「土木建築業は、国民生活の根幹たり、此の任に當る者其の責務重大なり」を業是とした、秋田県土木建築請負業協会の創立時の精神に則り、我が業界は先頭に立ち、インフラ復旧・整備に立ち向かい、この国難たる事態の克服が使命であろうと思います。



創刊号を読んでの感想

鹿角支部長

村木 通良

秋田県土木協会会報の「創刊号」を拝読し、我々の先人が建設業に寄せる思い、矜持に感銘を受けました。

特に「土木建築事業は一国文化の象徴産業の先駆にして實に国民生活の根幹たり此の任に當たる者其の責務重大なりと謂ふべし」で始まり、技術・経営の向上などを掲げる『業是』は現代の我々にとっても至言であり、建設業のあるべき姿を再認識した次第であります。



創刊号を読んでの感想

山本支部長

大森 三四郎

このたび、昭和10年の創刊号を拝見させて頂き、当時の『業是』は現在の建設業界の目的と何ら変わっておらず、あらためて感銘を受けました。昭和8年7月の設立時は並々ならぬご努力のご努力の賜物と存じ上げ、敬意を表し、今後も会員一同一致団結して、地域社会に根ざした建設業界でありたいと思います。



創刊号を読んでの感想

秋田支部長

加藤 憲成

昭和10年創刊の秋田土木協会会報を読んで、当時、社会情勢が混沌とした時代にあっても、営々と努力をされ、現在に至る「建設業」を確立された先人達のご苦勞と意気込みには頭が下がる思いです。長期にわたる不況と「かじ」のきかない現在の日本は、まさにその時代を彷彿とさせるものですが、先人達の尊い意志を引き継いで、活力ある建設業を再生しなければ、との思いを新たにいたしました。



創刊号を読んでの感想

仙北支部長

佐藤 吉博

秋田の建設業界を築いてきた私どもの先輩たちは、土木建築を国家産業とする強い信念をもって切磋琢磨し、業界の統制を図ってこられてきたかと思います。

時代は情報化社会となり、情報入手は電子媒体へと移るなか、紙面で閲覧する機会が無くなるのは残念であります。今後は時代に沿った新しい形での情報掲示に期待をしたいところです。



創刊号を読んでの感想

雄勝支部長

菅 良弘

創刊当時は、日本全体が国運に寄与すると意気込み、国家として一つになっていく時代であったと思います。

そのような中で、岩崎町（現湯沢市）出身の和賀眞一氏や北林庄作氏等諸先輩が、現協会の礎となる「秋田県土木建築請負業協会」を設立した当時の思いが伝わってきて、改めて、『業是』の重みを噛み締めています。

物書き の コトバ



コラム・随想執筆者の方々から、
最終号によせた文章を掲載します。
懐かしい顔ぶれが勢ぞろいし、
最終号を賑やかに祝います。
ライターやカメラマンの方々から、
連載当時の苦労話などを
面白く語っていただきます。

頭 の中 の 引き出し

文章の内容のよしあしは、自分の頭の中の引き出しに、どれだけ言葉やイメージが入っているかにかかっているかもしれない。

引き出しの中にいろんなものがたくさん入っていると、開けると溢れるようにドッと出てくる。取捨選択に困っているときは、うれし涙にかきくれる。ろくなものがないときには、声を出して泣きたくなる。

詩を創るときに、特にそれを痛切に感じる。

引き出しの中に、いつ、どんな方法で入るのか分からない。意識して入れようとしてもそんなに収穫はない。

だから、できるだけ大きな引き出しをいつも溢れるように満杯にしておくためには、じっとしてはいけない。せつせと歩き、見たり聞いたり、読んだり話したり、食べたり、時には真剣に議論したり、ということをし続けることが大事だ、といつも思っている。

あゆかわのぼる

最終号によせて

とうとう米寿になった。家の者にお祝いをしてもらったが、あまりうれしくない。ぼんやりと過ぎ去った昔の思い出をたどる事がある。その思い出の中に少年時代にすごした男鹿市戸賀浜塩谷の時代が出てくるとなつかしさに胸が熱くなるのを覚える。それらの事を「アンプラの里」に書いたが到底書ききれぬものではない。お湯(風呂)をもらいに提灯を提げて暗い道を帰った時の事を思い出す。体はほかほかとあたたかいし波の音を聞き乍らばあさんの後について歩いていると、ついもっと歩きたい欲望にかられた。なぜか提灯の色は赤味を帯びていたことを思い出す。季節は春から夏にかけてであろうか。これが晩秋になると提灯は白茶けてレモン・イエローのように見え、早く家に帰りたと思った。変なことを覚えているものだ。物書きはこんな事を拾って書くことがある。

酢屋 潔

秋田の近代化遺産にふれて

「秋建時報」に関わりを持ったのは、平成5年に秋田県建設業協会が発行した『60周年記念誌』の編纂にお手伝いしたのがきっかけである。当時、協会の保管庫に眠っていたタブロイド判の業界新聞の束は、協会を始め秋田の歴史そのものを語る生き証人で、その無言の呼びかけに強く惹かれるものがあった。

のちに私は同新聞に「秋田県の土木建築の近代化遺産」の連載を担わせていただいた。近代化遺産に関しては明治、大正、昭和初期(戦前)の秋田のさまざまな建設事業に触れることができ、私自身のライフワークにもなった。近代秋田の土台づくりをした建設業界の先人たちの功績は今も、橋梁やトンネル、建築物など立派な形として残されているものが多い。人がこの世に生を受けた以上、何かを形として残そうとする自意識の由縁なのだろうか。その爪の垢ほどでもあやかりたいと思う昨今である。

藤原 優太郎

物書きのコトバ

「秋建時報」が全面電子化に移行するという知らせが届いた。この3・4月合併号が紙面最終号になるという。まったく思いもしていなかったのが驚いた。私がこの随想欄に最初に寄稿させていただいたのは、1994年(平成6年)8月号だった。それ以来、17年。考えてみれば随分長い間お世話になっている。これも時代の流れなのだろうか。感慨が深い。

そういえば、200字詰め原稿用紙を目にしなくなってから、もう何年になるだろう。私の初めての本、『秋田いで湯100泉』(無明舎出版/1987年)の原稿はすべて手書きだった。一度書いたものを消しゴムで消し、文章を何度も書き直す…。パソコンのワープロソフトのコピー&ペーストであつという間にできてしまうこの作業を、当時はエンピツで原稿用紙のマスを辛抱強く埋めていった。今同じことをしろといわれても、とてもできそうにない。私が文章を書くことで生計をたてるようになった20年ちょっと前には考えも及ばなかったことではある。

永井登志樹

記念特集によせて

^{やまことば}純正な日本語と読者に媚びないますらおぶりの「もの書き」として名高い阿川弘之氏にファンとしてある作品を送りつけ、評を乞うたところ、

「貴女の文章は俗っぽい表現が目立つ。これは内容がよくても作品の品格を貶める。例えば“飛鳥の如く飛び込む”“ひしと抱きしめる”などなど。」—有難い御訓えだった。

文藝春秋四月号掲載の各界識者125人による“日本を憂う言叢中、赤瀬川原平という作家の一文——“モラル”というのが紙屑みたいになっている世の中、捨てた紙屑を拾って皺をのばすのは容易でないが、プリンターから出てくるものではなく、手書きの文字や習字等、地味なものすべてがこれからの日本に必要かつ次世代に受け継ぐべき能力だ…」

大方の人びとが、もはや書くのではなく打つ、即ち“もの打ち”になっている今、「もの書き」という詞はもはや死語になりつつあるのでは？

菅 禮子

最終号によせて

「秋建時報」にコラムを書かせていただくにあたり、幾通りかの連載テーマを提案させていただきました。媒体の特性などからして、「建物シリーズはどうだろうか」などと。

最終的に選んでいただいたのが「秋田の水風景」でした。建設業の業界紙に「水風景」とはずいぶん異質なものを感じるのですが、人工物の対極にある「水風景」という自然景観を連載テーマに選んでくださったことに、皆さんの度量の広さのようなものを感じ取った次第でした。

ときあたかも、未曾有の大震災・大津波の発生。建物の損壊どころか、町全体が消滅してしまつたような地域もあります。国土をもう一度ゼロから造り直すような取り組みになります。建設に携わる皆さんの経験、技術、パワーが、県域を越えて求められるでしょう。皆さんの今後のご活躍をお祈りしますとともに、物書きの私としても、一層読み応えのあるコラムの執筆に腐心しなければならないなど、思っているところです。

加藤 隆悦

記念特集によせて

1935年創刊以来の貴い歴史をもつ機関紙に、たとえ4年間という短期間でも、その表紙絵をご提供できたことは、絵を描く者として貴重な体験であり、人生の誇りにもなりました。

この表紙絵にかかわってきた70才後半は、多忙の中で、ひたすら懸命に、心の表現を伝えようと、描き続けていました。その意味でも印象深いものがあります。

そんな折に、この度の大災害です。想像もできなかった大惨事に原発事故も加わって、日本の国が沈没してしまうような深刻さに、毎日胸の痛む思いです。

ただ、見直したこともありました。日本人、特に若い人達に想像以上のボランティア精神が潜んでいたことです。若い皆さんが汗だくになって救援活動している様子、寒さにふるえる被災者によせる暖かい言葉の数々を聞いて日本はまだ捨てたものではないと痛感しました。

幸い秋田県は災害を逃れました。災害地復興支援の一貫として県内建築業の皆さんが、長年培ってきた実力で、秋田県人のつくった建物が歴史に残る堅固なものになるよう、この貢献のチャンスを大事にさせていただきたいと思います。

ペーパーから電子版への新たな一步を祝すとともに、業界のますますのご発展を祈念いたします。

白澤 恵舟

秋建時報 紙面最終号に寄せて

関係機関・団体の皆様から『秋建時報』紙面最終号にあたり、ご挨拶をいただきました。

秋田労働局長
坂本 忠行

社団法人秋田県建設業協会の「顔」として、毎月ご送付いただいている会報は、会長の幅広い知見と協会の熱心な取り組み等々に触れることができ、会員相互、関係者を結ぶ素晴らしい絆です。

労働行政の記事も、安全衛生、雇用対策など深いご理解をもって掲載いただいております、感謝申し上げます。

電子化の時代となり、厚生労働省も人事労務マガジンを登録企業に無料配信(秋田労働局HPから簡単に登録できます)しておりますが、秋建時報を手にとって眺める絵や写真、しっとりとした重さも忘れがたい思いです。新時代に向けてこれからもがんばりましょう。

社団法人
全国建設業協会
会長
浅沼 健一

貴協会が刊行されている「秋建時報」は、昭和10年1月の創刊以来、70年を超える永きにわたり、会員企業に対し様々な情報の提供をされました。

このたび、本号を最終号として全面電子化への移行とされ、ホームページの掲載のみとする決断をされました。

時代とともに情報伝達の手段も変化しております

が、更なる内容の充実とともに、より広く、より効率的な情報提供が引き続き行われますことをご期待申し上げます。

建設業労働災害防止協会
会長
銭高 一善

昭和10年1月から発行されてこられた「秋建時報」の格調ある紙面をもって秋田県内の建設業の様々な情報を発信され、会員の皆様の利便に供してこられましたことに対し、深く敬意を表します。今後は、社会の動向に伴って変化する会員のニーズにいち早く対応するべく、協会ホームページ上に掲載されるとのことですので、なお一層重要な役割を果たされることとご期待申し上げます。

独立行政法人 勤労者退職金共済機構
理事長
額賀 信

本号が紙面最終号となるそうですが、秋田県建設業協会の広報誌として長く果たしてきた役割を思い、関係者の皆様のこれまでのご尽力に対し心から敬意を表します。また私も勤労者退職金共

済機構としても、建退共関連の仕事を進めるうえで大変お世話になりました。機構を代表してお礼申し上げます。建設業は厳しい環境に直面していますが、人の営みが続く限り建設業の重要性も続きます。電子版「秋建時報」が秋田県建設業界の今後の発展に寄与することをご期待申し上げる次第です。

財団法人
建設業福祉共済団
理事長

吉田 一彦

秋田県にちなむ今の全国レベルの話題は何か。それは東大が保存する臓器の一部をMRIで処理し、隣人『忠犬ハチ公』の正確な死因の究明が76年ぶりになされたというニュースです。この驚くべき長期データ保存とテクノロジーの進歩に世上の人々は驚嘆の声をあげております。

くしくもこれと同じ76年間の長きにわたって輝かしい歴史と実績を積み重ねてきた秋田県建設業協会広報誌『秋建時報』。この全面電子化は、毎月同誌を手にするのを喜びとする者として信に寂寞の思いです。これもまたテクノロジーの変革と時代の要請によるものと言うべきか。

新たな『秋建時報』の旅立ちを祝すとともに、平素格別のお世話を頂いている秋田県建設業協会の更なるご隆昌を切望してやみません。

財団法人 建設業振興基金
理事長

鈴木 政徳

貴会「秋建時報」には、昭和10年1月創刊以来1200号、76年の永きにわたり発行を続けられ、このたび最終号を迎えられましたご努力と積年のご成果に対しまして、心から敬意を表するものがあります。地域の建設業が、住民の安全と安心、社会の発展基盤づくりの役割を果たしていくためには、平素から諸活動を広く周知し地域の皆様の理解と協力を得ながら進めることが肝要です。今後ともホームページを活用した電子版広報の充実に創意と工夫をされ、所期の目的を達成されますよう祈念いたします。

東日本建設業保証株式会社
秋田支店
支店長

舩屋 成一

時代の流れとともに、「秋建時報」も紙面発行が最後となりました。協会では早くから電子版にも取り組んでいたもので、机の上で簡単に記事を一覧できる便利さで利用していましたが、いよいよ紙面が終わりとなると、書棚にしまわれた綴りも厚みを増すこともなくなり、名残惜しい気もします。書籍も電子版が普及しつつある昨今、ネットを通じ世界のどこでも読める「秋建時報」の新しい展開に期待しています。



本紙発行をもって、秋建時報の紙面版は最後となり、5月号からWeb版へ全面移行となります。

Web版の掲載に当たりましては、電子メールによる掲載案内を配信いたします。

案内を希望の方は、次の通り電子メールまたはFAXを下さいますようお願い申し上げます。

[表題] 秋建時報Web版案内希望
(メール・FAXとも)

[本文] 《案内配信希望のメールアドレスをご記入下さい・複数可》

E-Mail:honbu@a-kenkyo.or.jp
Fax:018-865-2306

秋建時報のURLは以下の通り。(検索エンジンもご利用ください)

[秋建時報](#)[検索](#)

<http://www.a-kenkyo.or.jp/shuken/index.html>

ありがとう 「秋建時報」

専務理事
堀江敏明



「秋建時報」は昭和10年、「秋田県土木協会会報」としてスタート以来、「秋田土建協会新聞」などを経て、秋田まごころ国体の昭和36年に現在の形となっております。

平成22年には第1200号が発刊さ

れ、まもなく傘寿にならんとする歴史であります。

戦前戦後の建設産業界のその時々と時代の変遷を「秋建時報」は見事に見つめ、伝えてきました。

紙面としては最終号となりますが、「秋建時報」の精神は新たな媒体で永遠に受け継がれます。

雪の多い厳しい冬でしたが、各地にタイガーマスクが現れ、ほのぼのとした話題もありました。

国内観測史上最大で戦後最悪の自然

災害、東日本大震災が春を迎えようとしていた日本を震撼させました。

被災地の皆様の日も早い復興をお祈りいたします。

山はまだ雪景色であります、平地ではその雪も解け、ふきのとうが芽を出し、恵みをもたらす雪どけ水のせせらぎにネコヤナギが咲くこの時期、紙面「秋建時報」最終記念号発行、誠に感慨深い限りであります。

ありがとう「秋建時報」これからも!

編集後記

本会機関紙「秋建時報」の電子化は平成18年5月号の試行から始まり、紙面と並行して電子版を作成、本会ホームページへの通じて広く一般に公開し、レイアウト・量的な制約から紙面へ掲載できなかった記事・資料等を掲載するなど、紙面を補完するものとして活用して参りました。

その電子版も開始から5年を迎え、平成22年の経営委員会の協議を経て、その後の理事会において新年度からの全面電子化という結論に至り、本紙の発行をもって紙

面最終の記念号とすることとなりました。その編集に際し、本協会機関紙創刊号からの歩みに触れる機会に恵まれ、昭和10年の「秋田県土木協会会報」の創刊から始まり、時代により名称を変えながら発行、そして、本会の情報発信のみならず、協会の歩み、建設産業の歴史の記録として脈々と続いてきたものを振り返り、会報の役割を再認識したところであります。

本紙の形態は変わりますが、今後も本協会・建設業界の動き、また、その時折々のトピックスをお伝えして参ります。

最後に、3月11日、宮城県沖地震に端を発する東日本大震災に際し、被災された方々に対しまして心よりお悔みとお見舞いを申し上げます。

また、広域停電を始め、交通、水道等ライフラインの一時途絶などに見舞われ、一時的にはありますが、一般生活のみならず各々の業務にも支障が出る中にも関わらず、記念企画にご寄稿いただきました皆様に誠に感謝申し上げます。

社団法人 秋田県建設業協会
編集担当 藤谷清仁